

ランドスケープ・アーキテクチャーの中の自分の「これ！」を見つけ出す

Finding My 'It' in the Field of Landscape Architecture

橋本 純 Jun HASHIMOTO

清水建設株式会社
Shimizu Corporation



一言で説明できる？

ランドスケープ・アーキテクチャーを勉強し、実務として携わる方々は、周囲に自分の職業をどうやって説明しているのだろうか。また、ランドスケープ・アーキテクトという職業にどうやって出会い、生業とすることを決断されたのだろうか。私は、短大の英文科を卒業後、日本の文化を広めるボランティアとして初めて渡米し、ペンシルバニア州の中学校で1年ほど活動した。その活動の終盤に受けた「職業適性テスト」に、「ランドスケープ・アーキテクト」というものが向いている職業の一つとして出た。それが私の出会いである。その職業が何かを知らなかった私は、仲の良かった美術の先生から、「庭とか公園とかを作ったりする自然を作る仕事をする人だよ。」と教えられた。単純に面白そうだと専攻を決めた後、家族や友人には「庭師みたいなもの」とも説明していた記憶がある。

この仕事に携わって20年近くになるとうしている現在、「ランドスケープ・アーキテクト」という職業は、日本でも認知度が高くなったと感じることが多い。「専門はランドスケープです。」と言っても、あまり聞き返されることが少なくなった。それは他業種の方との交流でも感じる事だ。しかし、「ランドスケープ」と言っても、それこそ植木職人の方から都市計画レベルのデザインをされる方まで、様々な分野で活躍する方がおられるのではないだろうか。一言では説明しづらい広い分野の中で、自分がどこを目指しているのかを明確にイメージして働き始めることは容易ではなかった、と自分のこれまでを振り返って思う。

疲れて弱って見失う

実際、私はこれまで2度、ランドスケープ・アーキテクチャーの分野から離れようと思ったことがあった。1度目は、学位を取得したアリゾナ州立大学の講義で強いスペイン語なまりの英語を話す教授が理解できず心が折れそうになった時、2度目は日本帰国後に働き始めてからである。

1度目と違い、2度目は本当に終わりにしようと思った。帰国して以来ずっと感じていた、建築とランドスケープの関係の不平等さ、貢献度を感じる事が難しい小さな都市部の

建築外構の提案、連日の残業、上司間の意見の違いや指示ミスにより流れていく無駄な時間など、いろいろと蓄積して本当に疲れていた。疲労と混ざって、自分が目指しているところがどこなのかを見失っていた。お金持ちのためのランドスケープではなく、ただ緑化面積を満足させるためだけの計画ではなく、社会に役に立つ意味のあるランドスケープを作るには、自分の実力では無理だというお告げだと、精神的にも弱くなり仕事から離れた。

「これ！」

しばらくして知人に紹介されたのが、「エコロジカル・ランドスケープ」という開発と自然環境保全の両立を目指すデザイン手法だった¹⁾。当時は不勉強者で、「エコロジカル・ランドスケープ」という言葉も、ゼネコンの土木の中でそのような手法を使って環境保全に貢献していることも知らなかった。しかし、お話を聞いていくうちに、これだ！と思い、正直に「自分が目指していたところにたどり着いたという気持ちです。」と伝えたのを覚えている。

「エコロジカル・ランドスケープ」という考え方は、自然環境を分析・理解し、自然環境への影響を低減できる手法だと理解している。建築の外構といわれるものよりも、スケールの大きいランドスケープの骨格をつくる。

この手法を活用した開発で、私がかかわった事例の中に瀬戸内 Kirei 太陽光発電所がある²⁾。約500haの敷地であるが、そのほぼ半分を自然保護ゾーンとして既存の塩性湿地を残したことに加え、「錦海ハビタット」という生物多様性に貢献するエリアを創出したものである(図-1)。



図-1 錦海ハビタット

残念ながら、プロジェクトへの参加は途中からであったが、日本帰国後、初めて自分が関わったものが形となって出来上がっていくところを見ることができた、私にとってはとても重要なプロジェクトの一つである。プロジェクト完成後も太陽光発電所部分の施工は続く間に、「錦海ハビタット」に生息する鳥類が増えたり、誘致を試みていたネズミの生息が確認されたりという報告があった。改めて、周辺環境を含む場の特徴を理解した上で計画の妥当性が、ランドスケープ・アーキテクチャーという分野の強みであることを再確認できたプロジェクトでもあった。

日本と海外のランドスケープ・アーキテクトの違い

「錦海ハビタット」に続き、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の受託研究に関わる機会があった。この研究では、国立公園内での地熱発電所開発に対する規制緩和を受け、優良事例形成のために「エコロジカル・ランドスケープデザイン手法を活用した設計支援ツールの開発」を行った³⁾。

関わる中では、職業の認知度に反比例して、日本ではランドスケープ・アーキテクトがどういうことに貢献できるのかが理解されていないということだった。結局、日本の「ランドスケープ・アーキテクト」は、建築外構で緑化をする人という認識が多数であることが分かった。それに対し、研究の中で視察したニュージーランドやアイスランドでは、ランドスケープ・アーキテクトがプロジェクトの中心となり、地熱発電のエンジニア等と対等な立場で協力し、時には専門家として作業員等を教育し、地元住民などとの相互理解を促進する架け橋となる役割を担っていた。

違いはこれか！と感じた瞬間であった。確かに、私が海外で就労していたときに地熱発電所に関わった経験はないが、他の案件であっても、前述のような建築とランドスケープの不平等な関係を感じたことはなかった。限られたスペースでの計画では、チームとして解決しなければならないことがたくさんあり、話し合っただけでいいものができるというスタンスで、ランドスケープ・アーキテクトやシビル・エンジニアも平等に意見を出し、顧客を満足させようとしていたことを思い出した。

世の中の波に乗る

平等に意見を発することができる立場を確立するために何をすればいいのか、私には正解は見出せていない。孔子は「四十にして惑わず」と言っただけで、私はまだまだ迷ってばかりだ。「ピオトープを作りたい」という要望とともに、「汚い泥水ではないもの」とか「鳥が来たら困る」といった依頼内容が入ってきたとき、そもそもピオトープとは何なのか、生態系とは何なのかを説明して理解してもらうために労力を尽くすのか、時間の無駄だと判断して諦めるのか、解決策が見出せずに迷ってしまう。

しかし、世の中はそんな頓珍漢な人々だけで構成されているわけではないと勇気をもらう動きもある。様々な企業も動き出しているSDGsや第三者認証の取り組み、そしてそのなかの気候変動への対策の一つとして注目されているグリーンインフラである。

この波は、ランドスケープ・アーキテクトも上流からプロジェクトに参加することで、環境への負担軽減を実現できるということを知ってもらい絶好の機会だと信じている。建物だけ、構造物だけでは解決できない、地域や流域といった広い視野で全体を捉えて、土地利用や施設配置を考えることは、ランドスケープ・アーキテクチャーの基本ではないだろうか。私が学位を取得したアリゾナ州立大学での必須スタジオでも、それは最初に教えられたことだった。頓珍漢な要求に迷っている暇もなく、この流れを利用すべく、自分の「これ！」を信じて、活躍の場を確立していく時だということを忘れないようにしたい。

ランドスケープ・アーキテクチャーの可能性

偶然の出会いであったランドスケープ・アーキテクチャーという分野ではあったが、ここまで続けられた理由は何だったのかを改めて考えると、それは、やはりこの分野が持つ可能性にあるといえる。職業を一言で説明できない幅広さもその可能性の一つである。また、事業関係者だけを満足させればよい時代ではないことは、昨今のSDGsやESG投資の動きからも読み取れる。こうした動きは、決して対立を生むものではない。異業種や団体が切磋琢磨することはよいのだが、問題解決には協力して進めることを大前提としたものである。

私は自分の「これ！」を見つけたが、今後も視野を狭めず世の中の波や協働者から刺激をもらい、ランドスケープ・アーキテクチャーの可能性を拡散すべく活動を続けたい。これから出てくる未来のランドスケープ・アーキテクトのためにも、その活動を「これ！」の中に含めることが、今、自分ができる・やるべきことだと感じている。

（略歴）

1974年宮崎生まれ。アリゾナ州立大学ランドスケープ・アーキテクチャー学科2000年卒業。ハーバード大学院デザインスクール、ランドスケープ・アーキテクチャー学科2003年修了。米国で約5年就労後、ナイジェリア、広州を経て帰国。2016年清水建設（株）入社

補注および引用文献

- 1) 小川総一郎（2009）：エコロジカル・ランドスケープというデザイン手法：理工図書
- 2) 錦海ハビタット：瀬戸内 Kirei 太陽光発電所建設における湿地再生 < <http://www.uit.gr.jp/members/thesis/pdf/honb/578/578.pdf> > 最終閲覧 2019.08.13.
- 3) 地熱発電導入事業者向け環境・景観配慮マニュアル < https://www.nedo.go.jp/library/ecological_landscape.html > 最終閲覧 2019.08.13.